

大学ゼミ教育考

——教育学（徳本）ゼミ総括——

徳 本 達 夫*

On University Seminar Education:
The Case of TOKUMOTO Seminar

Tatsuo TOKUMOTO*

「あなたの人生を意味あるものにすることが
できるのはあなただけです。なぜなら、その人の人
生は、その人が作り上げる『作品』だからです。
他の誰も手助けすることはできません。放棄する
のも自由です。」
——高橋源一郎¹⁾

はじめに

「認諾」という言葉を初めて耳にした。「改ざんで自
殺 国「因果関係」 姿勢一転 森友国賠訴訟終結
大阪地裁 国が妻側の請求を全面的に認める「認諾」
の手続きを取ったことで国に対する裁判は同日終結し
た」(毎日新聞、2021年12月16日付け)。

「赤木ファイル」を元に真相解明を求める原告に共
鳴していた一人として国への憤りを記しておく。原告
の妻の言。「夫は国にまた殺された」。「認諾」を生む
この国でこれまで私は何業をなしてきたのか。

当初、小文は、退職者の身軽さゆえの蕪稿であっ
た。4半世紀に亘る広島文教女子大学(2019年共学
化。以下、本学)における教育学ゼミ(以下、教ゼ
ミ)に関わった記録の一端である。大学教員としての
自己評価報告²⁾、大学授業論についての座談会方式の
報告³⁾、教育実習の報告と絡めたゼミ報告⁴⁾、本学で
の最初の数年間所属した短期大学部時代の実践⁵⁾等
も絡めた。だが、今回の「認諾」を契機にさらなる検
証を試みることにする。

0. 「何業」

結論を冒頭と最後に記す。以下の3つの資料は結論
に至る材料である。

(1)「単純な助言」 私は「何業」をなしたか、な
しつつあるか。「認諾」の決定を前に、国家というも
のはそのようなものだ、と詠知り顔に言う人がいる。
しかし、多数は公憤、怒りの意思表示をしている。不
正義への怒りを共有した。「世界の刑務所に正義を

訪ねて」という副題を持つ、バズ・ドライシナーの
『囚われし者たちの国』⁶⁾のおかげである。囚われし
者たちを普通の市民にするためにあらゆる手立てを講
じている人びとの活動と見解を訪ねる旅を読者は紙上
で経験する。人間への信頼に希望を抱かせる。大量投
獄や大量不正義の現実を前に、巨大な問題への対応に
団体への寄付、集会への参加等以外にできることはあ
るのかとの問いへの著者の「単純な助言——意識をも
て、と。問題と解決策について学べ。それから、耳を
傾けてくれる人なら誰にでもあなたの言葉を伝えよ」。
しかも、これが誰にでもある「英雄的資質」である、
と著者は言う。

「単純な助言」は教ゼミでも大事にしてきた。それ
が誰にでもある「英雄的資質」である以上、活用しな
いのは罪であり、恥である。教育的営為はこの3つを
体感的に学ぶことである。学びは動詞形である。バズ
が追求し続けるものも動詞形のことがらである。
「愛」が行動の言葉であるように、「正義」は動詞で
ある。正義はひとつの旅だ。けっして止まらず、けっ
して満足せず、けっして安逸をむさばらない。正義はひ
とつの運動である。正義イコール動くことなのだ⁷⁾。

(2) 徳本ゼミの自己評価 以下、「単純な助言」
が教ゼミでどう具体化されてきたか、検討材料を提示
する。教育学演習以外の授業でも、これらを意識して
関わってきた。より凝縮されたものが教ゼミで展開さ
れたことになるだろう。私の見解が妥当かどうか。大
言壮語の誹りを免れないだろうか。

事実の確認。ゼミ卒業生は100人強。『広島文教教
育』投稿者は6名のべ9作品。彼らに共通する点は以
下。当事者としての意識は高い、社会的発信への思い
は強い、発信への抵抗は低い、文章作成能力は相対的
に高い、省察的实践家としての姿勢は確か、投稿を励
ます仲間の力強さ、困難な事象に個人・集団として対
応しようとする勁さ、話し合いが持つ力への信頼と弛
まぬ対話姿勢、等である。

各ゼミの演習・卒論の正規授業時間は週1コマの3

* 元本学教員

年間。全ゼミ共通。関連作業や授業外の関わり時間は各ゼミによる違いはある。徳本ゼミの時間はどれほど濃密／淡泊であったか。学生の評価に待つしかない。

I. 教育学ゼミの取り組み

以下は、教ゼミの特徴とその具体例、特にゼミ運営に関わる記録である。今回、補足・修正を加えた(2021.12.17)。

資料1. 教育学ゼミの取り組み (2020.9.10)

1. 複数指導体制と生活者の視点

(1) 複数指導体制下の恩恵 1990年、本学着任後数年間、私は短期大学部に所属した。他教員同様、併設学部の授業も担当した⁸⁾。そのひとつが教育学演習Ⅳであった。当時、教育学担当教員は4人体制。半数以上のゼミが複数指導体制という、贅沢な時代であった。各ゼミの運営実態は不明だが、教ゼミでは幅広い学びの交流があった。学生には無論、教員にも有益であった。春季休業中の2～4年の教ゼミ生との2日間の合同学習会では、新3年生の30枚レポート報告(教育学演習Ⅰ・Ⅱ担当教員関係)、新4年生の卒論構想発表がなされた。学科行事の卒論の中間発表や最終発表に関わる事前指導も合同方式で実施された。

複数指導体制は教員学生共に豊かな学びの時空であった。私の教員修業の道場となった。私の関わりは武骨なものであった。私自身の育成歴も絡み、経験の総体を賭しての質問や応答を心した。根拠のある、当事者性の感じられる質問や応答を意識した。借り物の知識や単なる体験の披歴では役に立たない。必然性のない沈黙は不在の証でもあった。上下関係を意識させない、風通しのよさが自由闊達な議論を生む土壌であった。二人の上司と同窓者の人間味ゆえであった。有難いことであった。

私自身、1968年に大学入学し、結果として当時の「政治の季節」から受けた洗礼が無意識の中で醸成されていたのだろう。現在進行形の時事問題に無関心と私には思えた、当時の多くの大学教員の授業や振る舞いには疑問を感じていた。結果として大学教員の一人となった私には、そうした学生時代の思いを微力でも越えたいとの思いがあった。批判は自らの実践の中で超えていく。さもなくば批判は空砲にすぎない。雀であつてもすぐ慣れる。

その後、学科編成の変化に伴う人員の配置転換等により、最終的に一人指導体制となり、教育学ゼミの学びに関する責任を担うこととなった。その責任の自覚分、事業報告も兼ねて標記の報告を続けてきた。先輩教員が残した遺産を食い潰さないためである。1人体制は独善に陥る恐れがある。何よりも豊かな学びは外に発信せずには得られない。後述する、本学本学科の学会誌『広島文教教育』投稿へのゼミ生参加である。

(2) 生活者としての関わり 教ゼミ運営の特徴の

ひとつが定期的なゼミ食事会であった。大学という時空のなかで可能な限り生活との繋がりを大事にするという土壌がゼミにあった。当然、学外での会食方式ではなく、学内での手作り方式。各自が手作り料理を持ち寄り、料理の紹介をしておきの会食。手料理が持参できない教員は資金援助をした。私は手料理派。会場準備と片付けは基本全員参加。生活者としての力量の一端を交流できた。2～4年学生教員計30人超の時代もあった。共食を通じての関係づくりの時空は相互関係をより近くした。教員・学生共に経済的にも有難かった。学生の負担は材料費等、500円は超えなかったのではない。

その後、1人体制時代にゼミ室での調理方式に発展した。準備や片づけ等を通して、さらに生活人としての姿を交流しえた。学びと生活とのさやかな融合である。15人程度の時代であった。各ゼミ共通の会食会のほか、理由をつけて新規開設した。結果的に新入生歓迎会、七夕会、忘年会、卒論発表慰労会、合同ゼミ、追出しコンパ、その他、適宜の会食会等々となった。ゼミ室は学びと食の場となった。

2. 教育学ゼミの授業の特徴と意図

(1) 教育学ゼミの初志 生活者としての交流は、授業としての教育学ゼミを豊かにした。教ゼミは教育学を学ぶ、教育学を生きるゼミである。教育学の理念を自分の生活に具体化する。生活からの疑問を教育学の知見から読み解く。講壇的な学びではない。生活者の視点や生活を意識した授業を展開することに繋がった。当然と言えば当然だが、教ゼミの初志はどこまで具体化できたか。これは全てのゼミでの課題である。

教育とは「教」と「育」からなる。両者は一体だが、順番は逆である。育ちあつての教えである。育つことを欠いた教えはあり得ない。演習では自己形成史を時代や社会との関わりの中で捉え、自己や周囲の課題に向き合う学びを大事にした。その集大成としての卒業論文指導に関わって私の指導の質が問われた。提出期限遅れである⁹⁾。あるゼミ生の場合、人間関係の問題に時間を取られ、同時に完璧主義的な部分が卒論の完成度へのこだわりとなって現れた。

学生の育ちの充実が学びの質に反映する。自己卑下や責任転嫁を超える学びが現状を受け入れる姿勢を生む。それが育ちに反映し、自己肯定感の確保のために用いていた時間と精力が学びへと向けられるようになる。「育」はそれぞれの速度、相応の時間を要する。一般的に自己の時間ではなく、学校制度の時間が優先するこの国では、育ちそびれが起きやすい。幸い、相対的に余裕のある大学では自己の育ち直しが可能となる。「育」を意識しながら、卒論提出まで指導するのが基本である。それだけに期限遅れは、指導性の不足や不備を問うことになる。

(2) 人間臭さを 授業場面だけではなく、会食等

を共有することの意義は既述した。授業としてのゼミでも生活や生身性を尊重することに意を用いた。「育」の視点を大事にしたからである。

今日、人工知能（AI）が相性診断をする時代である。だが、育むべきは出会った相手と質の高い関係を作り続ける意思と能力であり、それらが育まれる時空作りである¹⁰⁾。そのために人間臭さはいっそう大事になる。AI時代の教員として、この部分での存在価値が問われる。人間臭さとは生活者の身体である。状況に対する主体的な応答である。その人らしさ、その人の人となりである。

学生・教員共に生活者として相対する。教員は学生の自立へ向けての助動的介入を行う。その介入は生活の部分疎かにしては無効だろう。却って害になりかねない。学生の生活が見えていることが大事になる。介入の適切さは、学生を越えた生活者性が教員にあってこそ生まれる。説得的となる。それがどこまで助成的であるかは学生が評価する。卒業後の学生からの評価は相対的に遠慮がない。だが、在学中の評価はどこまで妥当か。大学という時空が持つ力関係があるなか、そのような力関係の時空を無化するの、上記のような生活者性の交流であろう。学生が遠慮なく指導の質への異議申し立てができる関係を作りうるかどうか。これが決め手となる。準備・調理・片付け全般を含む会食を共にすることの意味は大きい。

生活の部分土台にした関わりは、正規の授業は無論、卒論指導においても大事になった。集団学習＝指導体制を重視した。関係性は多様に結ばれる方が生産的である。ある学生への指導は、総じて他の学生へのそれである。相互に他山の石となり、憧れの対象となる。社会関係を生きる生き物ゆえ、自分に無関係なことは皆無である。

(3) 研究的実践家を育てる ゼミ生の育ちは一人ひとりの人間臭さとなって発現する。育ちの豊かさと確かな学びとは相俟って具体化する。とりわけ教育実習体験は生活を含む学びであるゆえ貴重である。各自の経験と学習の総体と絡めて深めるには、育ちの部分を含めた徹底的な対象化作業が必要となる。学習主体かつ生活主体としての自覚に繋がる。

学科行事としての実習報告会は実習生全員による学びの成果報告の場である。教ゼミでは、それをさらに発展・深化させることを重視した。それだけの質量が実習体験にある。徹底した事前学習と事中体験ゆえである。今後の学習課題の明確化と具体化、卒論への発展等である。それを具体的な形で残す経験を保障すること、それをゼミという集団学習体制の中で具体化すること、活字化することによって社会的な発信を通して発信責任を担うこと等である。

実習体験の対象化作業は教ゼミに限らない。しかし、理由は不明ながら、他のゼミでは学会誌への投稿という形にはならなかった。その後、私の退職と共に

この学びとその投稿作業は終わった。あるいは中断なのか。この事実がこの取り組みが他ゼミに広がらなかった理由なのか。のちに検討する。

(4) 「自立と共生」の具体化 以上は、他者との共生をめざす個としての自立への応援である。自立は他者との関わりなくしては成就しない。演習Ⅰの段階から自己形成史に関わる相互交流を底流に置いた。この取り組みが総仕上げとしての卒論指導へと繋がる。卒論の主題には拘った。既述したような私の成育経路みからである。研究主題は、各自の自己形成史の中から浮かび上がったものを主とする。いかなる主題であっても、各自の当事者性が絡んでいなければ長続きしない。疼きは日常生活の中で遭遇する。不条理・非道・理不尽なことがらは性差別的な社会にあっては日常的なこととしてある。それらを多少なりとも改善するための一人となる営みが個の自立である。生涯に亘って自らが自己の人生を生きる主体として生き続ける意思と能力とを育み続ける。その自己形成への支援としての関わりである。卒論作成を自分たちの子どもを産み、育てるという感覚を体験してもらう機会とする。性別を問わない。育児性形成の一環である。このことは、後述する卒業後卒論作成の勧めにも繋がっていく。

自立と共生とは仲間作りの時空でもある。ありのままの自他を認め、尊重する包摂的な時空づくりが求められる。共食や共学はともに仲間作りの時空である。分断統治は世の為政者たちが取る常套手段である。小さな差異を大きな差異と錯覚させる政策を取る¹¹⁾。本来は共通の敵であるにもかかわらず、まんまと敵の術中にはまってしまう傾向は多々見られる。真の敵は高みの見物である。座して死を待つのではなく、反転する。科学的な事実に基づく合理的な見解を採求するような学びが事態を開開する鍵となる。研究的実践家たることがここに繋がる。

ゼミでは役割分担を置かなかった。対外的に代表者を出す場合は、その都度、適宜対応した。基本的に全員がそれぞれの役をその都度、担うことを大事にした。組織人としての自覚を育むという点で不足はなかっただろう。最も大事にしてきたのは、横の繋がり、縦の関係ともに必要に応じて対応するという、実践力を育むことであった。役割は、その都度、必要という自覚がないと、役割倒れになる恐れがある。臨機応変、円滑にゼミ運営が進んだのは、組織図に縛られず、必要に応じて役割を担ってきたことの成果であろう。その意味では、業績主義的な組織運営からは遠いやり方であった。それぞれが自らの器分の役割を担うことによってゼミ全体が機能するという仕組みであった。

3. 教ゼミ卒業生への発信

(1) 教ゼミのその後 『文教教育』への実習報告の投稿は、私の2015年度退職後は他のゼミも含めて現

時点までない。私が関わっていた時期のゼミ生たちが要求したのかどうか。種蒔きとして退職時の2年次生には前倒し的に2年間の学びを投稿するように励まし、結実した。その後の実りがいかであったのか。いずれも不明である。後述する合同ゼミでも種蒔き的に呼びかけを試みた。種自体の問題か。光・水・熱の不足か。

継続的な活動は当該者が実施しなければ、中断する。後輩が再興するには労力を要する。それゆえ、情性で続くものは別として、生成発展するものは継続することが力となる。立ち上げの労力、継続の労力への思いがあれば続く。この部分の当事者の評価は今後のことになる。

私も報告書作成は連続して実現できたわけではない。校務等の関係の他、私の力量不足ゆえである。教育学演習の所期の目的と教育実習体験対象化作業とを結合させるには半期や1年間の中では困難であった。責任主体となった以後は継続できた。2年間の指導計画の中でこの作業に取り組むことができたからである。結果、一定以上の質量が得られたゆえである。

この取り組みについての評価は既報の13作品が材料となり得る。さらに卒業生のその後の生活と仕事等を通して間接的に検証される。ある学習経験の意義は、経験の有無による違いとなって現れる。教ゼミでは報告書作成作業に力を入れた。他ゼミはそれぞれ独自の意義を見出した学習に力点を置いた。それぞれ卒業生がそれらをどう活用しているか。評価の材料となる¹²⁾。

(2) 確かな評価者としての卒業生 在学中の教員への評価は妥協的な部分がある。私自身の長い学生経験からいえば、指導教員の意に反することはできれば避ける。私が無意識のうちに評価される身体を生きていたからだろう。しかし、本来の評価は、担当教員から来るのではない。導師との出会いを自ら求めるならば最高だろう。眼前にいたくとも、本や映画、芸術の中に可能性として存在する。教員への評価は相対化される。

在学中の学びや経験を基準としての教員への評価は、卒業後の諸経験を基準にした時に別の評価基準となって現れてくる。また、卒業後に別の評価ができるような卒業生でなければ双方の成長はない。評価者としての矜持を持ちたい。

確かな評価者となるには条件がある。生活・仕事・社会活動等にどのように参画しているか、である。「仕事人間」であるとすれば、個としての自分を壊しかねない。孤立しないで発信をされたい。『広島文教教育』という、発信拠点を活用しない手はない。

研究の実践家は、時事的問題への誠実な対峙によってより本質的な部分から共通の大同を踏まえた改革を目指し、実行していく。共通の大同とは、子どもの権利条約が謳う、子どもの最善の利益保障の実現に向けてのあらゆる取組を意味する。この一点では、反対す

る人は皆無のはずである。人間の安全保障でもある。大同は大道でもある。

虚偽・隠ぺい・忖度政治の土俵に乗らないためには、常に高次の視点に立つことである。教育哲学の授業等で強調してきた、「ボトム6」という、共通ベーシックという観点である。生き物としての人間存在に必須の要素としての6点である¹³⁾。根源的な主題を追求し、しかもそれを授業という形にする姿勢は、研究の実践家としての姿である。学生時代にそのような体験を保障したい。卒業生の生活と仕事からその一端を検証したい。

「聞く耳」が目される。一部の「お友達」の言いつきは聞き、反対者のそれには耳を閉ざした首相たちの後継であれば、注目される。だが、「御用聞き」の耳では不可。物言わぬ人びとの声を聴き取り、遠音に耳を澄まし、闇の中に目を凝らして観、輻輳する匂いを嗅ぎ分ける、全身皮膚感覚を生きたことが求められる。主権者として全ての者に求められる姿勢である¹⁴⁾。確かな評価者としての生き方である。

4. 教ゼミから広げる

(1) 卒業後の報告作成 社会参画のひとつとして卒業後の実践報告の発信がある。既述の通り、私が定年退職後は、教育実習対象化作業は投稿されていない。学生がその意義をどこまで実感していたのか。仮に担当教員の同意が得られなくとも、ゼミ生で発信することは可能である。学会員なのだから。そのための種まきが十分でなかった。私の反省事項である。内発的な動機付けではなかったということだろうか。別の活動の方がより魅力的だったのか。

退職者としての私ができることは、蕪稿の発信と共に卒業生への投稿呼びかけである。当事者の発信はいずれも、課題の見える化に繋がる。話題にならないものは存在しないことにされてしまう。沈黙は力ある者に都合の良い、無言の同意とみなされる。不都合な場合は、不在者とされる。ここには客の体しか存在しない。人間の客体化である。客体化を防ぐべく議論の舞台を作り、そこに当事者としての課題を提示する。発信の場は多様であることが大事である。嘘や排他を越えるには、根源的な共通の土俵に立つべく学的発信の時空が必要となる。本学会誌の出番である。

(2) 在学生への発信 標記主題は、在学生としても取り組むべき価値がある。ゼミ担当教員が動かない場合であっても、学生が主体的に学び合い、投稿することは大事になる。主体的で対話的な深い学び（アクティブ・ラーニング）の具体化である。投稿すれば編集担当者が吟味し、掲載価値のある作品となる指導・助言が始まる。学びを求める者の前には自ずと教師が現れる。箴言の通りである。逆に言えば、教員がいても、学びの欲求がない場合には、教員は開店休業の身となる。学びの欲求を喚起することが不十分だったと

ということか。学びの欲求に最適な対応ができなかった教員と出会ったということか。今後の検証を要する。

おわりに

以上、筆者が関わった時代のゼミ運営等についての概要を記した。ゼミ運営の実践報告を著した先駆者のひとりが1990年代の社会科担当の伊藤裕康会員である。伊藤ゼミの特筆すべき点は学外研修の実施であった。各地の社会施設等の見学、優れた教員の授業参観、宿所での学習会等が柱であった。事前の企画、交渉、実施、考察、報告書作成をゼミ生が主体となっていた。優れた実践であった。私も刺激を受けた。なお、伊藤ゼミ以外の各ゼミでの授業絡みの取り組みについては、本学会の共有財産とすべく積極的に報告することが必要になろう。各ゼミ当事者が取り組みの実態と成果・課題等を江湖に示されることを期待している¹⁵⁾。

Ⅱ. 卒論から卒業後卒論へ

卒業論文は本学卒業必修である。それゆえ本学卒業という学びの質保証となる質量が求められる。実際に相応の質量であったか否か。卒業後の生き方、生活・仕事・社会参加等の質量によって評価される。「卒業後卒論」ともいうべき作品の作成は、その評価の手がかりの一端となる。卒業後の人生に関心を持つべく投稿を勧めることは、教員としての呼びかけである。以下、掲載に際して、重複を削り、字句を正した(2021.10.20)。

資料2. 卒業後卒論作成の勧め (2019.7.25)

はじめに 奇をてらった訳ではない。まじめな話である。卒業後も卒論を書かないといけないということでもない。逆である。卒業後に卒論に相当する作品を書きたくなる生き方の勧めである。卒論は卒業必修であるがゆえに、最悪でもコピペ的な作品であっても提出することが求められる。他方、卒業後卒論は単位に無関係である。時間的制約もない。全くの自由作品である。それゆえ一人ひとりが各自の人生から求められる。人生経験分の深みや広がりもある。実年数分の、より本質的な実践的な作品となり得る。表現は多様多様である。以下、意義と実際、課題を述べる。

1. 作品が生まれる条件 条件とは、日々、生存していること、これだけである。生存そのものが卒業後卒論そのものとも言える。日常的に課題は纏わりついてくる。生き辛さを実感する場面は多々あるだろう。家庭・職場・地域あらゆる場所で家族関係、友人関係、職場関係等々、当事者としての感覚を持つ限りは研究主題は周辺に密集している。

本来、18年以上生きて来ていれば、結果として眼前の目立つ事象に疼くことは少なくない。諸課題山積の現代社会である。その時代を生きるものとして、それらが日常生活に反映していないわけがない。感受度は

多様であろう。敏感すぎて持て余すということもある。却って閉じることもある。他方、鈍感すぎて疼き以前ということもある。前者は、何を選んでも根底において繋がっている。生涯をかけて取り組めばいい。逆の場合も、多様な経験を通して、疼くような課題に出会うこと必定だろう。それに取り組めばいい。私の蕪稿は疼きからである。

現実問題としての卒業後卒論はありうるのか。ある。現時点で5人延べ8作品である¹⁶⁾。

2. 表現＝生きること 表現する存在が人間である。生きて在ることとは、表現主体として現に存在し続けているということである。生き物は表現と共に在る。人間の新生児は生存すべく、あらゆる反射行動をとる。それらに周囲が適切な対応を取ることで、新生児は生存を保障されるのみならず、生存に必要な諸能力をさらに獲得していく。それらを広く表現活動とする。表現活動は、新生児としての精緻さ、力強さを示す。周囲は感知能力を発揮して新生児の表現が持つ意味を的確に理解し、最適な対応を試みる。主体と主体との呼応関係が続くことによって、生存の保障と発達の保障とが満たされる。育があつての教である。この順番は逆ではない。「育つ・育てる・育ちあう」関係が総合的に展開される¹⁷⁾。

表現する主体として生き物は生涯、生き続ける。したがって、生き辛さに対しては、そのような生き辛さを生み出す政策に対して、異議申し立てのための表現を疎かにしない。諸課題に対する無言の対応は賛同とみなされる。YESと言わないものはNOなのだ、とは性的同意に関する標語である。むしろ、YESでなければ、積極的にNOと意思表示するような文化を育む方が生産的である。そのような意思表示が可能になるのが対等な関係の中での営みである。家父長制的な文化の中でこのような基本的な手法が疎かにされてきた。そのつけを今日の、性平等後進国の日本で味わっている。男女格差を示すジェンダーギャップ指数120位。先進国最下位。沈黙を強いる側が沈黙を同意と身勝手に理解する。二重の暴力である。白井聡『主権者のいない国』（講談社、2021年）に暮らす中で主権者意識・主権者感覚をソフトに奪われ、引き渡し続けてきた結果が現在である。徹底的に表現主体である自己を生きる。ここから主権者としての回復が生まれる。白井は、主権者としての回復の契機となるものが個としての感性であるという¹⁸⁾。

3. 卒業後卒論の作成 卒業後卒論の作成とは何か。希望的に言えば、生活・仕事等の局面において、卒業生を支え、労い、励まし、叱咤する役目を果たすのは卒業論文であろう。担当者としては卒業生の将来の、生涯の伴走者になる役割を担いうる具体的な作品として卒業論文を位置付けた。卒論作成時点で、それまでの成育歴＝学習歴を対象化し、その対象化と関わって疼く主題を選定する。1年間継続して取り組む

に値する主題である。したがって、指導は工夫した。

①主題は、本人にとって疼くもの、当事者性のあるもの。主題は大きくとも構わない、一生抱え続けるに値するような主題を想定する。②主題には常に当事者として関わる。当事者性を大事にするゆえ、書けないことも自分の現在の姿として尊重する。そのまま、卒論の一頁となる。取り組む中でその時の自分への労い、労りが生まれる。それぞれの速度で生きる。他者と比べての作品ではない。学校教育の中で他者との比較の中で自分を位置づけてきた身体を解き放つ。ありのままの自分をゼミの時空に持ち込む。③相互の身体を解放する。ゼミ生は、「書けない」という、その時点のゼミ仲間に対して相応の配慮をする。ありのままの存在としてゼミに参加する。居場所の保障であり、他のゼミ生の報告へ関わるという意味での出番の保障である。書けない自分をゼミの時空に置くことによって、書くこと以上に大事なものがあろうという発見を体験的に味わう時空作りである。社会的包摂の体験である。④卒論ゼミは集団で行う。ゼミ生が取り上げる主題は多様であったとしても現代日本の課題を生きる仲間として取り上げる。共通性と個性とがある。現代社会をどう捉えているのか、ゼミ生それぞれの生活と姿勢が見えてくる。また、そこからさらに発展的に学びが深まり、広がる。最終的には巨大な現代社会が様々な視点から多角的に見えてくることを期待した。はじめのうちは主題は別であったと思ったものが共通の問題への迫り方のことであったことに気づく。その意味では、主題は多種多様であるほどいい。

「金太郎飴」という言葉は褒め言葉では使われない。しかし、卒論では金太郎飴であることを求めた。どこを切っても書き手の存在が見える作品ということである。別人格の者が複数で作成しているのではない。多様な資料を活用するにしても、活用する主体が明確であること。ネット環境が進む中、コピペという手法は不可能ではない。担当教員の読解力次第では簡単にすり抜けられる。信義の問題ゆえそのような無様は御法度だが、それ以上に教員側の専門性の問題である¹⁹⁾。

4. 卒業後卒論の質量 作成に費やした時間は1年間であっても、取り上げた主題は、本人の実年数の中でのこだわりであり、疼きであった。その意味では生活年数分を賭けて作成した作品である。卒業後も学生を掴んで離さないであろう。比喩的に言えば、卒業生と共にあるということである。主題を抱えて生活・仕事の日々を送る。学生時代の取り組みを振り返り、現時点で自作を対象化する。新たな成果が出た分、成長の証である。踏ん張っていた時代であったという確認は現在の本人を労わる。いつでも、いかなる時でも、その人と共にあるものとしての卒論である。それだけの時間・労力・資金をつぎ込んで完成した作品である。愛着は一入であろう。平素のレポート作成と同様の、あるいは、それ以上の手応えがあったがゆえで

あろう。それだけにその作品は卒業生をして支え、鍛え、励ます。

ある卒業生は、学校現場の多忙さを語りつつも、卒論に取り組んできたことからすれば大したことではない、と語った。卒論に真摯に向き合った日々が彼女を支え、励ましているという。教職への真摯な姿勢を自ら育んだからだろう。

この事例は象徴的である。それゆえに卒業後の卒論との関わりを大事にしたい。まずは、節目節目で主題を振り返り、時代や社会との関係の中で主題を再度、掘り下げる作業を行うことが期待される。主題はどこまで自覚されているか。主題設定における疼き度が決める。この作業は他からではなく、卒論の書き手であったという過去の自己からの呼びかけである。自発的主体的に取り組めるであろう。この作業は自己のみではなく、死者、わけても非業の死者や未来に出会うであろう、他者への／からの応答・呼びかけでもあるだろう。そのような気分になれるかどうか。すべてどのように取り組んだかによる。本気であれば、たとえ自分としては不本意な作品であったとしても、不本意であった過去の自分との対話が生まれ、それを受け止めることから始める。受け止めた分が成長の証となる。むしろ、不本意であると感じられる方が健全であろう。学問の前に謙虚であることの証である。卒論に取り組んだ時点よりは、当該主題に関する研究も進んでいる。書き手自身の経験の総体の広がりや深まりの分、主題への迫り方はより肉薄してきているだろう。さらに総合的に捉えることもできているだろう。大学教育を受けることでできた「100人の村の1人」として、精一杯の作業に引き続き関わっていくことは、大学教育を受けることでできなかった他の99人に対する責任としてある。この部分は、大学生の仲間の前で過ごすうちは、実感が得られにくいかもしれない²⁰⁾。

5. 経験の総体が増えるなかで何を書くか 卒業後の生活は学生時代と違って社会体験の質と量が直に迫り来るだろう。したがって、内容は自身の直接・間接の体験と絡めて、豊かに綴られるだろう。実生活は生活と仕事と相まって多忙であろう。そのなかで気づきをメモして残して置く。それが点から線、面、立体となっていく。エンデの「秘密の玉手箱」である。疑問であれ、怒りであれ、自分の身体から出たもの、応答したものがその中に入っていく。時事問題への批評はもとより、時事問題が自身と家族の上に起こす余波をメモしていく。これらは時々刻々の作業としてなされる。ネット上のフェイク情報ではなく、自身の身体が感じ取った、嗅ぎ分けた事柄が発信の基となる。白井のいう、感性の観点からの主体性の回復である。卒業後、どのような日々を過ごすか。いか様であれ、気づき、嗅ぎ分ける主体は自分である。その感覚は大事にしたい。

多忙ななか、卒論の主題を忘れてしまうことはある

だろう。逆に言えば、忙しすぎるということでもある。主題を意識することがない場合は、要注意である。用心したい。それはそのまま、超多忙であるという状況とその原因を解き明かすという課題ともなる。卒論の主題の応用問題でもあろう。

6. 122歳までの健康寿命 事例を挙げる。卒業後10年目の桑野作品、6年目の松浦（大坪）作品はその代表例である（ともに『広島文教教育』第35巻、2020年所収）。卒業後、一定程度の期間を経て、自分の主題に向き合った成果の一端が綴られている。

いずれも、多忙な中での作業となった。それでも書き続け、投稿することによって社会的に発信した。これは大きい。内輪の発信とはいえ、拡散される時代である。卒業生数を単純計算すれば、卒業生会員は1,300人を超える。学会誌の寄贈先である教員養成系学科は、200は超えるだろうか。波紋の広がりを待ちたい。発信しなければ無かったことになる。無名の卒業生にとどまる。発信を通して、固有名を獲得し、主題の発信を共有することになる。「世直し」に向けての連帯協力への一歩である。発信は意思表示である²¹⁾。

本学卒業生に限らない。各地で若者が発信している。論文作成を業としない人も卒業後卒論作成といった作業に取り組むことが社会的な作業として期待される。誤解のないように記す。卒論作成者に限らない。その機会がなかった人の社会的発信作業への支援は別途、必要となる。実際に各地で先駆的な実践が行われている²²⁾。

7. 書くことは社会を変えること 書くことは考えること、自己を振り返ること、自分を取り戻すことである。これまで奴隷状態に置かれた人も書くことによって、人格のある生存者として浮上した。政治的には奴隷であったとしても、精神的には主体的人格として「主人」をも超えた。

優れた表現者たちの活動によって、表現の自由は破綻する状態には至っていない。書く力は筋肉と同様、使わないと衰える。衰えるのは書く力だけではない。時代や社会への異議申し立てが疎かになる。民主主義の度合いが低下する。声あげ、書くことを通しての声あげが社会を正常な状態に保つ。自分が置かれた状況に対してどう応答するか。その人固有の作業である。指紋は全ての者にとって固有である。身体的応答も固有である。作られた、操作された身体的応答に陥らないためにも、書くという固有の個人としての作業に励みたい。その作業に参加するものが増えた分、日本社会の民主主義の度合いは高まる。感性の復権である²³⁾。

いかなる家族形態であれ、生き続けることで経験の総体は広がり、深まる。当然、複雑さも増してくる。単身者であれ、パートナーであれ、相手との関係の中で家事・育児・介護等の共同作業がどのようになされていくか、という問題にも繋がってくる。フェミニズムの標語、The Personal is Political. をどこまで意識で

きているか、ということであろう。

古い世代がこれまで体験できなかった世界を初めて体験する世代になりうるのが日本の現行世代である。優れた作品も次々に刊行されている。長い間、発信の機会を奪われてきた女性たちの無念・怨念の吐露でもあろうか。人類にとっての損失であったことに気づき始めた国から変革は始まっている。政策決定過程への女性や少数派の参画である。非対称を生きすることは、当然、歪む。対称であるからこそ、他方の歪みが当方の歪みであることに気づく。

書くことは社会を変える。コロナ禍、若い女性の自死が急増している。前年比880人超え。主に高校生。中学生も。コロナ禍が女性をトリプルで直撃している。日本の長期自公政権が作りだしてきた労働政策の破綻である。

仮に自死した高校生や中学生たちが生き延びて本学に入学したとする。私が現職だとしてどこまで彼女たちの力になりうるのだろうか。男性であるという理由だけで得られた既得権によって作られた社会状況を根本から変えていく手法としてのフェミニズムであり、その運動を担う、賛成するものとしてのフェミニストである。この視点を欠いた大学や教員は、これからの時代の教育を担う役割は果たせないであろう。それはまた、教員自身が当事者として時代や社会にどう向き合うのか。試金石となる。講壇的な授業では役に立たない。私の授業報告に価値があるとすれば、非力ではあっても当事者性を意識していたという点であろう。高邁な論を展開したとしても、その論を当事者としてどのように認識し、かつ実践しているかが問われているのが現代である。その意味では、全員が当事者性を生きることが可能になった。有難い時代が到来したと言える。ミソジニイやマンスピーキングと言った、男性が陥りがちな日常生活での態度を批判することによって、非対称の関係から対称の関係へと止揚していく。コロナ禍はすべての人を当事者として位置づける役割を担った。パンデミックでなければできなかったことである。気候変動危機とパンデミックが深く関係していることが証明されれば、気候変動危機への対応はより真剣になるだろう。

おわりに 卒業後に実践記録を書くことは、壮大な世直し作業として位置づく。参加しない手はない。総がかりの子育て・教育を担う一人として学び、生活してきたはずである。コロナ禍が炙り出したこの国の辺りさをたとえ僅かであっても改善していくこと。改善が日の目を見なくとも、種は蒔くこと。志は次の世代が受け止めてくれる。当事者としての生き方は伝播する。波紋は広がる。

パンデミックは各国のリーダーや市民のありようを炙り出した。性別に拘らずにリーダーを選んだ国では、正当に選ばれた女性リーダーたちが科学的合理的判断に基づき果敢に決断し、その政策を国民が納得し

うようなコミュニケーション能力を発揮した。言葉が力を持つことを証明した場面は多々あった²⁴⁾。翻って、日本では後手、小出し、出しそびれと形容されるような対応が見られた。ウイルスとの賢明な関わりが人類の存続に繋がる。コロナ禍への対応はそのための試金石である。

結びに代えて一さらなる応答へー

(1) 徳本ゼミ評価の3つの観点 冒頭で徳本ゼミの自己評価を卒業生の投稿を元に試みた。15年以上、責任主体として教ゼミを担当してきた。そのなかでの正課外活動としての投稿である。

徳本ゼミの評価は3つの観点からなされる。実習体験対象化作業等に象徴される研究的実践家の能力は卒業後、どのように卒業生を支え、励まし、叱咤しているか。自己形成史を踏まえた卒論作成は、どこまで主体としての自己を生き続けるよすがとなっているか。生活性を共にするなかで培われた他者との関係づくりの手法はどこまで活用されているか。

これらはすべて融合している。自立と共生であり、包摂的生き方であり、主体的かつ協働的な生き方である。個としての生き物的な感性を大事にする姿勢でもある。時代や社会の課題である、時務への応答から逃げない芯の強さである。草の^{つよ}勁さでもある。ささやかであっても、その土台をゼミ生と共に作り続け得ることができたかどうか。蕪稿を届け続けているのは、卒業生に対して無様な姿を見せないための私なりの美学である。実年数分の責任を果たし続けることは、子や孫をはじめ、後なる世代への責任でもある。非業の死者への礼儀でもある。課題は山積している。市民の役割は大きい²⁵⁾。

(2) 選ぶことは捨てること 有限な時間と精力。すべてを選ぶことは不可能である。選ぶことは捨てることである。徳本ゼミでは上記を選んだ。他は捨てた。取捨選択の評価は内的動機からのそれであったかどうか。火種をさらに高める関わりができたかどうか。北条民雄や中上健次は、川端康成から「書きなさい、書きなさい」と何度も励まされたと回想している。選んだものが捨てたものよりも意味があったと思えるには、主体的で共同的な作業が必要になる。凡夫である私は、先人に倣って自ら書き続けるしかない。

日常生活の中で日常性を越えるものを作り出すには相応の精力を要す。学生は、大学の教育課程を合格基準以上で達成するには相応の精力を要する。正課以上の活動を達成するにはさらに別の精力を要する。教ゼミ生による教育実習体験の対象化作業とその公表は正課以上の活動であった。正課以上分の手応えがゼミ生にどれだけあったのかという問いである。卒業後の投稿等は、全くの自由な活動である。前者の活動が途絶えていることは、活動の意味不足故か。活動を生む熱量不足故か。担当者であった私を問うている。同時

に、経験の有無による違いを考える材料にはなり得る。

評価は改善の材料となる。具体的な事実をもとに自他の検証を待つしかない。後者のそれは継続中である。評価は同様である。具体的な作品があることが一定以上の役割を担ってきた／いることの証であろう。ともに、総がかりでよりよい社会創りに参画する志と能力を持続する学びとは何かを問う営みである。

私は現役時代に「何業」をなしたか。退職の身で「何業」をなしているか。主権者としての自問は続く²⁶⁾。引き続き疼きを元に発信したい。「認諾」に象徴される民主主義の危機に対して満腔の怒りの吐露でもある²⁷⁾。

(3) 自生を生むもの 農的に言えば、市販の苗がすべて根付くわけではない。蒔いた種がすべて発芽するわけではない。他方、発芽率は不明だが、親世代の元から地に落ちた種は発芽する。自生である。人間の営みとして自生の次元に至る関わり方とは何か。具体的な実践を通して検証していくしかない。

コロナ禍は、従来の日常性以上の、また別の新たな日常性に対応する力量を社会全体で創り出すことを求めている。他からの指示や命令を待つのではなく、自他で総がかりで創り出していくほかない。その営みが自律的・自立的な主権者としての矜持となる。(2021.12.11/12.20)

註

- 1) 高橋源一郎『誰にも相談できません—みんなのなやみはくのかえ—』毎日新聞出版、2020年、83頁。『海の鳥・空の魚』を生きる人びとを描いた^{さざなみぐわ}鷺沢萌(河出書房新社、1990年)は、「うまくいった一瞬」を大切に(240頁)。『私の話』(河出書房新社、2002年)は、鷺沢自身の「海の鳥・空の魚」を描く。今回、初めて集中的に読んだ。同時代に読まなかったのは後の祭りである。
- 2) 徳本達夫「大学授業考」(『広島文教教育』第35巻、2020年所収)。
- 3) 名塚紘一・徳本達夫「大学教育考」(『広島文教教育』第35巻、2020年所収)。
- 4) 徳本達夫他「教師教育と教育実習」と題する計13本の一連の報告。(『広島文教教育』当該年度版所収)。
- 5) 徳本達夫「教育実践における他者理解と自己理解の関係」(広島文教女子大学短期大学部『幼児教育の研究』第18巻、1993年所収)。
- 6) バズ・ドライシンガー／梶山あゆみ訳『囚われし者たちの国—世界の刑務所に正義を訪ねて—』(紀伊国屋書店、2021年)、427-8頁。
- 7) 同上、423頁。
- 8) 学部の授業だけでも各期5〜6コマ。多忙な職場ではあったが、手応えは十分であった。
- 9) 一例を示す。完成度を気にかけられがゆえに満足できないままでは提出できない。最後まで書き続ける。時間は無限ではない。提出期限を過ぎると、受領不可、未提出扱いとなる。どここの大学でも同様である。指導教員は、この最悪を防ぐた

めのあらゆる手段を講ずる。事前の締め切りを設定して最悪を防ぐ。同様の手立てはとったものの、当該学生は自分の中の完成度を優先した。1分間である。日本の公共交通機関は定時運行を旨とする。日常的な身体での学びである。それでも、卒論には思い入れがある。妥協したくない。結果的に社会勉強としては高い買い物である。手続きを経て再提出する。作品の完成度は当然のこと、より以上に高まる。学生・教員共有しうる意地である。期限提出なら「優」評価であったものが「可」となる。期限を意識するような生活に変えたという点で当該学生には貴重な体験となった。教員として自分の苦い経験が生きた教材となる。眼前の教員の生きた事例から人は学ぶ。同様の事例は他のゼミでもあった。それぞれ担当教員は責任を自覚しながら追加指導をする。

とある学生の場合は、生活の乱れが絡んでいた、という。担当教員は生活の部分も含めて指導をする。これが基本形。その教員は、論文指導は自身が、生活指導は担任が、と分担方式を提案した。「教」と「育」との分離である。男性教員として当該女子学生の指導上の困難があったのかどうかは不明だが、その手法には私は違和感があった。馬が合う、合わないということはどこの世界でもある。2年次進級時点で専攻ゼミを選ぶ。分野と教員の二つの観点からの選択ではあるが、実際に指導を受け続ける中で相性が合わないことはある。教員の方が器を広げるのが基本形。教員は多様な他者との出会いを続ける中で器を広げ、深くしていく生き物。本事例の教訓は当該教員の報告が語るであろう。

10) だが、それは完璧な幸福を約束するものではありえない。AIは利用者双方が入力した情報を基にした組み合わせを計算するだけである。AIは2,000万冊の本を即座に記憶する。しかし、一冊の本の感想文を書くことは不可能である。なにしろAIは計算機なのだから。微妙な人間の、生き物の機微などは分からない。天文学的な情報を記憶させても、優れた文芸はAIからは生まれない。「優れた」と感じる、評価するのはAIではない。当然である。いわんや人間の相性。学生からすれば、教員の姿が反面教師となるか、一つの選択の際の基準となるか。私は、大田堯のいう、「個体保存と種の持続」に倣って、優れた個として眼前にありたいと願って仕事をしてきたつもりである。

11) 分断統治の対象は女性に限らない。自身の立場の他、自分が関わる相手の条件によって多様である。専業主婦か否か。正規労働者か否か、非正規であっては短期雇用かパートか、既婚か否か、等々。為政者側は、天の半分を支える側が連帯して異議申し立てすることを恐れるのか、あらゆる差異を分断に利用する。コロナ禍、潜在していたことが顕現し、顕在していたことがさらに悪化中である。いずれも性的・社会的差別の現実である。Sisterhood is powerfull and international. (女性の繋がりは力強く、国境を超える)。かつて耳にした標語が持つ力強い響きは健在なのかどうか。男性にはこのような感覚を実感することができているのだろうか。産む可能性を持つ性であることよっての連帯が可能なのだろうか。なお、小杉礼子・宮本みち子編著『下層化する女性たち—労働と家庭からの排除と貧困』（勁草書房、2015年）所収の金井淑子論文等が参考になる。

12) 卓近な例では平和学習経験の有無がある。大学入学後に経験の有無が歴然として現れる。衝撃は経験者の方に強い。私自身は、教育哲学授業受講の有無による差を教育実習報告

会や卒論発表会等で感じ取った。受講をさらに呼びかけられるべきであったとの反省と共にである。学びの評価は受講しなかった者にはできない。学んだことの意味は事後的にしか判明しない。庭田杏珠・渡邊英徳『AIとカラー化した写真でよみがえる戦前・戦争』（光文社新書、2020年）は経験の重要性を語る一冊である。

13) ゼミ生は、高校生対象のオープン・キャンパスにおける道徳の模擬授業でこの大事な気づきを授業した（徳本達夫・教育学専修31期生「教師教育と教育実習（11）」『広島文教教育』第30巻、2013年所収）。本授業は指導案も資料として提示されている。SDGsの視点を踏まえた実践例として活用できる。

14) 教員バッシングも、分断統治の一例だろう。極少数の教員に向きそうにないと思われる、不祥事を起こす教員はいる。しかし、各界で不祥事を起こす人員を母数で割ったら、どれくらいの数字になるのか。研究者は明らかにしている。社会の木鐸としての役割を果たすべきマスメディアは学問的事実を丁寧にしつこく報道すべきだろう。政治状況に関して言えば、現下の喫緊の課題はいかにして連帯を作り出すかである。政権の暴走の歯止めは野党の責務である。学習性無力感が浸透する中、その非力は社会の崩壊を招きかねない。小異に拘りつつも、大同を優先する政策をとることが政党の本来の姿である。政権担当を目指さない政党は政党の体をなさない。党首としての自己を保ちたいという、無意識の願望なのだろうか。鶏頭となるも牛後となる勿れ、とは高校時代の漢文での出会いだが、何のための鶏頭なのか。政権交代が可能性としてあるような政治状況を作れば、官邸主導型の虚偽・隠ぺい・忖度政治は生まれようがない。冒頭の「認諾」などという、真相を葬るような手管はあり得ない。分断統治を戦略的に進めている政策中央の意のままにならないことである。そのような政治がもたらせた社会的損失は、時間的・経済的・精神的・文化的に計量できるのだろうか。スーパーコンピューター「富岳」はどのような数字を弾くのだろうか。当時の安倍首相による国会での118回の虚偽答弁の損失はいかに。他への欺きは自らをも蝕む。

15) 私が紹介できる限りで記す。原田正治会員が始めた理科ゼミ生他による「子どもの科学の祭典」へのボランティア参加、音楽ゼミ生による学内ロビーコンサートや学外発表、図画工作ゼミや書写・書道ゼミの学外活動としてのワークショップ（ともに継続報告がある。継続は力である）等々である。算数科今崎ゼミでは、大和ミュージアムと連携した、数学的活動の実践がある。地域発信・地域との連携等にも資する。いずれも優れた活動である。概要だけでも学会誌で報告したい。会員への発信となる。同じゼミでも担当教員の名称を冠するのがゼミ実践の実態を的確に示すことになる。その意味では、私が責任主体時代の教ゼミは徳本ゼミであった。

16) 福本優子は「学ぶということ—現場編」という、そのものずばりの作品を叙した。卒論での完成度は高かったものの、学校空間での学びが現実になっているのか、あるいは、学ぶ場を保障されてこなかった識字学級に集う人々の学びから学びの実相を感じ取ることが執筆の動機となった。

原口恵は、現場での葛藤から卒論での学びを糧に仕事に向き合う姿勢を自分のものにせんとした作業となった。その後、本学会での実践報告を文字化する作業にも取り組んだ。

同じく、本学会での実践報告を文字化したのは大崎友子、

大崎亜由美である。学会報告をしながら、文字化までは至らなかった者はゼミ生4名を含めて多い。本学会の損失である。多忙は承知の上で、私も含めて執拗な勧めが不足していた。当該会員には小文に目を通された晩には、後追的にはなるが、その後の経緯も含めて文字化されたい。当日の報告の文字化だけでも作品になる。優れたロールモデルに倣って、続編が生まれることを期待している。なお、他ゼミ生の山城実香報告には、応答を記した(徳本達夫「保育者教育考(3)」『広島文教教育』第34巻、2019年所収)。ゼミ生の報告への応答は他日を期したい。

17) これを書名とする本がある(井上寿美・笹倉千佳弘、副題を「子どもとおとなの関係を問ひ直す」、明石書店、2006年)。著者らは「子どもとおとなが響きあうこと」(4頁)を関係の根底にする。望むらくは子どもと権利条約、新旧教育基本法への著者たちの評価の開陳である。そのような条理や倫理への応答があってこそ、主体と主体との響き合いが生まれる。

18) 白井聡『武器としての「資本論」』東洋経済、2020年、280頁。

19) 本学では、1年次必修科目として人間科学入門が開講されてきている。私が担当者の一員として関わっていた時代は、全学科から12名程度の講師が各専門分野を人間科学という観点から講じた。配布冊子は講義の柱を数項目記載するだけの、いかにも不親切な形式であった。科目の主旨からしてもお粗末なものであった。それだけ初年次教育への教員の関心度が高くなかったということか。1年次必修科目として大学での学びを経験するに相応しい内容と方法とが必要であった。

改善策として、講師のひとりの一端を自己紹介という形で、講義の目的・内容はやや詳しく、さらに5冊程度の参考図書、場合によっては、事前学習課題の提示等を掲載する形式とした。講義は公開制。希望者は聴講が可能であった。当時、聴講可能教員の聴講がどれほどであったか。時間割で確認したが、残念な実態であった。私は担当者の一員という役得もあって全講聴講した。学生と共に課題への応答を記した。その中で気づきが上記、改善の材料となった。講義であって講演ではない。教育の一環として捉えるべきであろう。以前は、各講師の教育への姿勢が自ずと現れた。冊子改定後は、冊子の形式上の改善効果か、教員の熱量が変わった、と私には見えた。形を整えることによる全体としての底上げである。12名の教員が多角的に主題に迫る方式が実質化した。側面援護として「入門」授業報告書を可能な限り記録として残した。人間科学研究所の機関誌『人間科学研究所年報』の発刊と相俟ってである。講義の内容を他へも発信すべく、『ブックレット人間科学入門』も併せて、刊行することとなった。

その後は、組織改組によって生まれた教養教育部が主幹となって、実施責任者と4名の講師陣と合同で授業計画と内容とを組むという方式に変わった。講義テキストである。それはそのまま、一般に公開されてもよいような作品であった。このあたりの記録は当該部署からの発信が俟たれる。

人間科学入門から「出門」へ 「入門」があれば、「出門」がある。人間科学出門授業を構想することも可能であった。幅広く対象に迫る学びができたかどうかを問う科目となり得たろう。学生の成長度がそのまま本学の教育度ともなる。専攻分野だけの学びに特化せず、幅広く専攻と絡めて、総合的俯瞰的に学んだ成果を披露することになる。だが、実際に

はその種の科目は開講されなかった。次善策が、あるいは本来、その役を担うのが卒業論文だということであろう。必修は大原則である(卒業論文に関わる報告は行ってきた。特に徳本達夫「卒業論文考(2)」(『広島文教女子大学人間科学研究年報』第2号、2002年所収))。

20) 本来ならば、青年期時代に大学教育の機会が得られなかった場合も、そのような作品づくりの機会を保障する社会づくりが必要である。本学主催の公開講座では、「自分史」の講座等を担当した。社会人受講生が自身の関心領域に関わる講座の受講を通して、卒業論文に相当する作品を書くことを励ますことも意識していた。自分史の作成に取り組む受講者が複数あったことは、一つの希望であった。また、講座を通して、社会や時代を構造的に捉える発想からこれまで意識してこなかったものの、自分を閉じ込めていた課題に向き合う契機となったことは多々あった。契機はいかなるものであっても、学びは始まるという好例である。「あらゆる機会」「あらゆる場所」「日常生活に即して」教育の目的は実現されるべきである。1947年教育基本法が教育の方針(第2条)で謳う精神のささやかな具体化であった。

21) 本学会の独自性である、卒業時点での「会費10年前払い方式」。卒業生会員は1,300名を超える。仮に投稿者が1%13人ならば130頁は超える。この1%方式で行くと、現時点での会員の最後の投稿者の年齢は122歳。健康寿命を保つ動機となる。長寿が人間の安全保障の具体化に繋がることが肝心である。小文に目が留まった読者には、是非とも先鞭を取らねたい。小文を読んだことのこぼりです。当然、心優しいあなたのこと。自分だけの秘密にするなんてことはないでしょうね。10年会費は1万円。学会としては超破格値とはいえ、毎年、1,000円相当の価値を持った学会活動、例えば学会誌(広報誌を含む)発行かどうかを厳しく評価したい。その上で会誌の活性化・充実のために貢献したい。投稿は何度でも可である。会員の論文への応答でも十分価値がある。教員の論文への忌憚のない批判も大歓迎である。批判されない立場にいと、人は腐敗する。また、組織も同様である。その人が重要な役職についている場合はなおさらである。「逆命利君」を生きる人は普く優れた人物であるが、昨今の日本社会では、安倍・菅官邸主導人事管理の結果として自利に長けた官僚が跋扈しているのだろうか。一回、7万4千円超えの接待を受けて職を失うという結末となった女性内閣広報官もいる。参考人として国会招致される前日の入院。「飲み会を断らないで来た」と本人は言うが、女性のロールモデルからは程遠い。フェミニズムと無縁の社会を生きてきたのだろうか。菅首相の子息絡みゆえに断れなかったということなのか。真相を吐露することで、癒着構造を明らかにすることは汚名返上になるはずだが。緊急入院も、官邸力学の結果ではないと言えるのだろうか。全体の奉仕者という言葉が死語になったのか。若い官僚が次々に辞めていくと言う。厳しい職場にあっても、公僕としての誇りが職務を支えていたであろう。一部の上司が悉く裏切る。それで留まって改革を担って欲しい。

筆者自身は恵まれた職場ではあった。一連の悪態の次元からすれば、微々たるものであった。基本的に辞職は念頭になかった。力量不足の自覚は別としても、内部に留まって改革の担い手であろうとしたことが大きい。私の実践に対する批判には、実践報告の作成という形で応答してきた。批判した上司からの反応はなかった。人間としてずるいと思う。一読

されれば、批判への応答であることは即座に分かる内容ではあった。上司の批判が根拠を欠くものであったという証左であった。

結論。批判には、より根本的な部分で、しかも教員という共通の土俵に立った上での作業の中で返していく。学校現場では、教員免許取得者という共通の土俵はあっても、多種多様な教員が存在する。当然である。まずは、相手の見解を傾聴する。見解に謙虚になる。反論があれば、最後にする。「未熟なことは承知しているつもりですが」「いろいろ気づかなかったことをご指摘いただき、ありがとうございます」などと、前置きをして、教えを乞う形で質問する。場合によっては、示範授業を希望することもありうるか。反論に耳を傾ける気配がない場合は、嵐はいずれ通り過ぎる。避難所で暴風雨を避けるのが避難の基本。実行あるのみ。その上で実践報告を作成する。印刷物・活字化されたものを届ける。「ご指導をよろしくお願いします」と。残念ながら、多くの場合は、反応は返ってこない。それでも、根拠のない批判は収まる。論文は紙礫となる。ペンは剣よりも強し。論文は誹謗中傷を無化する。論難者を裸にする。直接話法で記述すると、倍返しがくる。一般論として、別の事例を傍証する形で書く。私の報告書作成の原動力のひとつでもあった。不合理・理不尽なものへの抗いである。思いを最も的確に表現する文章作法の修業にもなった。自然に文章は磨かれた。

22) 宮本みち子・佐藤洋介・宮本太郎編著『アンダークラス化する若者たち—生活保障をどう立て直すか』（明石書店、2021年）所収の各地の実践。

23) 韓国映画、キム・ドヨン監督『82年生まれ、キム・ジョン』（2019年）では、主人公が性差別社会の中で感じる生き辛さをカウンセリングを受ける中で気づき、自らのことを書き始める。全編、本人が書いた内容が映画で展開される。映画では父親の弟への土産品である万年筆（姉妹には安い文具）を弟のベッドの下で見つけ、コップの中に浸す場面が象徴的に描かれる。他方、原作（斎藤真理子訳、筑摩書房、2018年）では、性差別者の男性カウンセラーの手になる記録として描かれている。しかも、処方箋は無し。仮に女性であっても、フェミニストカウンセラーでなければ、キム・ジョンが置かれた状況への理解は不可能であろう。いわんや処方箋は性差別的なものにとどまるであろう。カウンセラーは性別ではなく、フェミニストであるかどうかが問題である。仮に、映画で女性カウンセラーが性差別を助長するような処方箋を出すという展開とすれば、原作よりももっとえげつない作品になっていたであろう。原作では、最後のどんでん返しに韓国における女性の現状の一端が突き刺さる。

24) 栗田路子・ブラド夏樹・田口理穂ほか『コロナ対策 各国リーダーたちの通信簿』（光文社新書、2021年）。優れたリーダーたちの発信は文章としても迫るものがある。肉声に接する人びとには圧倒的な感化を生むだろう。民主主義の成熟度・民度の高さが優れたリーダーを生む。国際比較のなかで日本国のリーダー安倍晋三首相は最下位クラスであった。

25) 「現実が変わるのは政府が方針を改めるときである。しかし、方針の転換は市民の意識の転換によってもたらされるのだ。私たちの誰でもがその大きな使命にひと役買っている」。ドライシンガー、前掲書、428頁。そのような社会づくりは乳児の段階から始まる。イブラム・X・ケンデー作、アシュリー・ルカシェフスキー絵、渡辺由佳里訳、明戸隆宏解説

『アンチレイシスト・ペーパー』（合同出版、2021年）は、その指針。反人種主義を生きるとは主権者を生きることである。読書は、ドライシンガーの言に倣えば、動詞である。確かな生き方を指針とする作品との出会いも動詞である。同志にもなる。

26) 思想家白井聡は『主権者のいない国』（講談社、2021年）のなかで主権者であろうとしない人の姿勢を徹底的に問い、「責任」を決め手とする。「究極的には自分の人生・生活・生命に対する責任」「人間が自己の運命を自らの掌中に握ろうとする決意と努力の中にしかない」（313－7頁）。身近に会う。ヤマザキマリ『ヴィオラ母さん—私を育てた破天荒な母・リョウコ』（文藝春秋、2019年）。そのような母親は、身近な尊い理解者が存在したことゆえだとヤマザキはいう。「一人でも自分の理解者を持つと言うことは、本当に大切なことなのだ」（90－91頁）。そのような存在になること／存在を得ること、いずれも動詞である。非業の死者を生む加害者にはそのような存在はいなかったのだろうか。「私」がその一人になり得ているかどうか。石井妙子の描く『女帝 小池百合子』（文藝春秋、2020年）は、どうだったのか。他者を手段とすることは、同志を生む動詞になるのだろうか。

27) りぼん・ぶろじえくと『新・戦争のつくりかた— What Happens Before War?』（株式会社マガジンハウス、2014年）。一声が他声を生み、多声となって作品化したのが2004年版。戦争推進者は手を変え、品を変えて戦争体制を日常空間に準備する。闇の中だけに限らず、白昼堂々と。「私」はそれに気づくことはできる。放置しておく、戦争前後は戦争状態となる。「認諾」はその一環であろう。信州ML管理人会（毛利正道代表）編『ストップ秘密保護法！信州300人発安倍首相への手紙』（あけび書房、2014年）は、時務への誠実な応答をなした主権者たちの記録である。毛利は「まえがき」で「『人格の発露』として」と記した。このような主権者が一定程度いるなか、「認諾」はなされた。

付記：従来、現職学会員として非力ながら『文教教育』投稿を心してきた。10年会費会員は1,000人超え。学内教員会員は20名前後。最低でも100頁の分量があって然るべきであろう。吉田裕午会員が編集委員長時代、ともに100頁超えを意識して積極的に投稿した。兩名退職後は70頁前後が続いている。寂しい限りである。その分、読まれる対象となる確率は高い。読者が二人ということは避けたい。本人と編集者あるいは印刷担当者である。編集委員（長）は一読されるのだからから、編集後記に簡単な感想を記すという方式も検討の価値はあろう。退職後、学会への参加が不十分となっていることへのお詫びの意味もあって、せめて会員投稿作品から学んだことなどを綴ることで会誌が双方向のやり取り、交流が生まれる契機にしたい。なお、推敲不足の作品は同じ会員として心がざわつく。大学教授としての誇りかけても最低限の推敲を意識したい。卒論ならば、「不可」評価の次元である。指導教員の指導性が問われる。自戒を込めて記す。

読者の声欄の設定も考えたが、投稿すれば済む話。特段開設する必要もない。自由闊達に議論がなされる言論空間になることを願っている。学外からの応答も。論壇誌ではないにせよ、ささやかな言論空間を作ること社会全体の底上げに繋がる。市井の言論が社会を成熟させる。（2020.10.20）。

補記：先日、2人の児童が焼死する報道があった。家族の同居人による放火事件であることが判明して以後、両親の心情

を想像するに酒が欲しくなくなった。石牟礼道子が言う「悶え神」の次元には到底届かないが、私なりの亡き2人への供養であり、関係者へのお見舞いである。飲酒欲求が減退しているのか。それでも私の身体から湧き出た感覚である。酒断ちで精神の平衡を保っている感じである。合掌。

犯罪被害者支援の活動に関わり始めて3年余。教育学の学徒の立場から被害者支援の在り方についてメモを続けている。いずれ蕪稿を発して御批正賜りたい。個人犯罪の真相解明の本気度と、国家犯罪のそれとの絶望的な隔たりが先の「認諾」である。『主権者のいない国』であるからの終結なのだろうか。虚仮にされているのが「私」である。ここでまた、学習性無力感の「優等生」がいくばくか生まれるのだろうか。私は「落第生」を選ぶ。(2021.12.16)

追記：JR可部線に新幹線が走った？！単線なのに！？遮断機が下りる間もなく、線路を渡り終えていて間一髪、無事であった。現役時代、日常業務を抱えつつ、原稿の締め切りに追われる生活が精神的ストレスだったのか。迫真の夢であった。退職後の今は、日常業務は激減。余裕の作業が続く。提出期限の25日必着を前に、家人が上記の夢の話を話題にする。家族共有の物語である。かつては資源の浪費を諫めていた家人も、相変わらずにメモを重ねる姿を受け入れるようになった。経済的対価はない。100歳の天寿を全うした大田堯を指針としていることを知っている分、長期的視野に立っているのだろう。先人に倣って、発信価値のあるものを届けたい。

国会議員の「文交費」(文書通信交通滞在費)の件が自民党の賛成を得られずに見送られた。使途を明らかにすると不都合なのか。理なき抵抗である。公的資金に見合った仕事をするのは当然のこと。この悪弊が「通常」とならないよう監視が必要だろう。

公的資金の援助を受けた研究も同様である。専門家ではない人から不出来と評される作品は汚点を残す。より一層の自覚が求められる。なお、本誌に関して、昨年は期限が1月22日に延期になった。その前の年は、期限厳守を徹底させたい、とのことだった。延期の理由は不明。学会会員への周知はなされず。延期の一か月間で完成した会員もあったかもしれない。公的な業務への責任の果たし方は、足元のことである。「ハインリッヒの法則」は警告する。(2021.12.20)

補足資料 2015合同ゼミ (2016.3.4)

以下は、私の退職1か月前の資料である。ゼミの今後のことも意識して、1年次生にも呼び掛けた。種蒔きでもあった。文字通り、資料である。私のしつこさを示す。当日の報告・質疑応答の記録は別作業となる。掲載に際して、重複を削り、字句を正した(2020.10.20)。

資料3. 2015合同ゼミ (2016.3.4) に寄せて (2016.2.28)

<はじめに> 以下の文章は、45分もあれば、一読できる。自分の作業に取り組み前に一読すると、本気度が増すだろう。既に完成している者は、手書きで追記してもよい。小さな文字の部分は飛ばしても可。([]の箇所)

<合同ゼミについて>

以下の趣旨の通り。積極的にそのための時空を作り出す。本来ならば、学生が企画してもよい。残念ながら、なかなか学生からはでない。正規の授業だけでも精一杯なのだろう。(2014年度卒業生からは、歴史的遺産へのゼミ生合同の訪問企

画が出された。ゼミ黒板の通り。まだ、実現できていない。学生がどこまで動くか。なお、専任教員としての立場では最後の合同ゼミとなる。この手法が続くかどうかは、ゼミ生が趣旨を理解して、賛同するかどうかによる。[これまでも卒業生の何人かとは広島県内で集まって合宿めいたことをしてきた。卒業生からの企画。そのように育った卒業生が美しい。声をかけてもらえることの醍醐味。ありがたい。食事を共にしつつ。料理人は私。飲み食いしながら。費用は一人当たり1,000円以下。当然。一般的に商品の値段は人件費。自分でやれば人件費は不要。何でもできる人は、金は最低限あれば、生きていけるだろう。場合によっては不要かもしれない。海の幸、山の幸を活用する。火は屋外炊飯の再現の通り。

折あれば、現在は現役の学生とも。そのうち、曾孫のような子どもをあやしつつ、料理もしながら、卒業生との合同ゼミも行われることもあるだろう。私自身、その時点でどこまで身体が活性化しているか。今の調子で行けば大丈夫だろう。天地に祈りながら仕事をしている。「あらゆる生類の天寿全う」を願って、私にできることは極力する、まだ時間が必要である、と。自分から寿命を減らすようなことはしてはならないだろう。最近、酒の量が増えてきた。禁酒。簡単なこと。新たに買わなければ済む。コンビニカードが曲者。カードは恐ろしい。]

さて、以下が本題。

<2015合同ゼミについて>

1. 趣旨・目的：①各自の1年間(あるいは4年間、18年間プラスαということも学生によってはあるだろう)の総括を図ると共に、ゼミ生同士の縦の学的な関係づくりをめざす。ゼミ生は子どもの最善の利益保障の実現をめざす同志としての関係。共通の目的を共にする仲間。学徒としての関係。いざ、集え。②自分の学びを文字化する作業を課すことによって思考力・判断力・表現力を養う。学的な関係を作るには、それなりの手法が必要となる。その修練の機会とする。いざ、試みん。③食を共にするなかで生き物としての共通基盤を体感する。(大仰なことをいうけれど、饗宴とは宴を共にすること。天と飯を分かち食らうこと。)さあ、喰らわん。④以上の作業を共にするなかで、自己・他者・世界・自然への責任の感覚が磨かれるだろう。よし、起とう。

こんな檄ははじめてだろうか。

2. 方法：4年生は卒論と絡めた、4年間の学びの総括と今後の展望(5分報告・10分質疑応答)、3年生は卒論構想(5分報告・15分質疑応答)2年生は1年間のゼミでの学習の総括と展望(5分報告・10分質疑応答)、1年生はゼミ選択の理由と期待、1年間の学び。(5分報告・10分励ましの言)、教員は1年間のゼミ指導の総括(5分報告・20分質疑応答)。

報告時間は5分。事前に資料を作成配布、参加者が一読しているという前提からである。したがって、報告5分間は質疑応答の時間に使うことが理想的。本ゼミでは、卒論も含めて、そのような手法で展開してきた。ゼミ生の読解力と読解速度は速くなっているはず。私はますます早くなってきている。(単純に頭がついてきていないのかもしれない。読んだつもりが、文字が頭を通り抜けているのかもしれない。)

[参加者数によっては、時間は融通が利く。なお、ゼミ生が20人を超えていた時代には2日間で開催。料理は各自が腕自慢の料理を持参した。多種類の料理にありつけた。結果的にバイキング方式。すぐなくなる料理と最後まで残る料理と。

手巻き寿司は人気だった。私の料理は最後に近かった。いちばん美味なるものは最後に残すということだろう。手製のヨーグルトも作った。(略)

卒業生が本学会で報告した年には、この手法が復活。私は炊き込みを3種類。おでん。豆腐ハンバーグの定番も。食べることは楽しい。ゆえに対話が弾む。]

3. 準備等 (1): 各自 A3 版 1 枚以上の資料を作成 (10.5ポイント、周囲余白20、45行45文字程度、分量はこれを超えてもよい。小見出しをつける。以下の徳本資料が一例。この書式は2段組25文字52行。1頁で5,000字程度。

4. 準備等 (2): 参加者は資料を前日までに提出されたい。他の参加者は当日までに一読のうえ参加されたい。万一、参加不能な場合は、紙上参加。仲間の資料を一読、所見を書いたものを提出する。これがお互いがよりよい社会をつくっていく時の技法。たっぷり学んだ後は、ゼミ専属の料理びとの手作りが待っている。生きるための食。よりよく生きるための文化という食。両方を食して人は生き物性を持った専門的な生き方をなす。 (略)

5. その他: 当初の計画では、昼食をはさみ予定だったが、今回は日程の都合で、夕食に変える。カレー。各自、1合の米を持参のこと。炊飯器はあり。(略) 料理は最高の頭の活用策。段取りの具体化。活用しないのはもったいない。認知症予防対策の最善策のひとつという証拠も出ている。)

< 4 年次生関係 >

0. 4 名の卒論終了 卒論発表後の後始末も終わった (2.24)。詳細は後述。

翌日、他のゼミ生が来研。卒論発表会での質疑応答等のことを聞いても、頭のなかで事後学習をしているという返事。ああ、情けない。他のゼミ担当教員の指導姿勢の一端。外野があれこれ口にするだけでもない。大事なことは自分から盗んで学ばなければ、自分の身に付かない。生涯、記憶として残するという自信なのか。自信とすれば、自己に対する過大評価。怪我をする。あるいは、自分の卒論に魅力を感じなかったのか。自分が生み出した作品に情がわかないのか。それはないだろうから、自己に対する愛情が足りないということか。で、その学生と即刻、ゼミ室で事後学習の作業。その後、メモをもとにやり取りをした。30分。さらに深い部分まで見えてきた。教員からの質問や意見に対する応答が不十分であったことも発見。お節介の私。

その点、本ゼミでは担当教員のゼミ生への絶大なる愛情がある。例年同様の原稿の校正、成績、会議等の合間での時間作り。以下、ここから見えてきたことのまとめ。

1. 子どもの貧困。これが本年ゼミ生共通の主題。最も時宜に適っている。子どもの貧困対策が不十分な国家は崩壊する。崩壊を防ぐための手立ては市民が子どもの貧困についての理解を深めた分しか実現しない。理解者が増えるための関わりを。

2. 23日の3年生の集団討論。参加者の少なさに驚いた。本気で教職を考えているのだろうか。教職を甘く見てはいけな。そこで時宜的な課題として、この主題を取り上げた。しかし、現実を知らないから表面的な討論。父子家庭・母子家庭の貧困を話題にする。冗談ではない。一人親家庭であっても、政策的に対応ができていれば、貧困状態にはならない。社会的な関心、構造的なものの見方ができない者は、現象だけを見て、それを問題にする。学校の教員になって、6人に

一人の貧困状態の現実にどう向き合うというのだろうか。情けない。私が担当していた道徳教育指導法では、子どもの貧困も取り上げていたが。担当者が替わった今はどうなのだろう。

2. この国の現在の体たらく。その原因は、目先の利益に囚われている人びとが多いからである。子どものことは目先のことでない。将来のこと。最低でも10年以上先のこと。政治家とは違って、政治屋は自分の当選のことしか頭にない。選挙権のない子どものことは後回しになる。子どものことを話題にしても、それは票目当てのこと。選挙が終われば、子どものことは気にかけない。政治家は先のことを考える。現在の政治がお粗末なのは、政治家よりも政治屋が多いからだろう。政治屋は自分の当選を意識する。投票率の高い層、高い業界の利益を優先する。大企業に対する税制の優遇はその象徴。結果としての談合。利権政治と批判されることが今なお、この国の政治を歪めている。

4名の卒論は、こうした社会に対する異議申し立てとしてのもの。すばらしい。初志としては文句なし。さらに追究し続けたい。阿部彩 (『子どもと貧困』) さんと共に。

学生がそのことをどこまで実感していたかは不明だが、子ども相手の仕事をするものとして、これから出会う子どもから、卒論では何をやってきたかと問われて、胸を張って応えることができるだろう。子どもは、自分たちの味方であることが分かって共にいい社会を作る仲間と思ってくるだろう。いい仕事を子どもと共にされたい。卒論のことを質問する子どもはいないという声もある。直接聞わなくとも、どのような学びをした者として私たちの目の前にいるのだろうか、という興味関心はある。鋭く見抜かれる。子どもの嗅覚は動物的だろう。

学生も同様か。授業担当者を前にどのような学びをした者として私たちの目の前にいるのだろうか、という興味関心はあるに違いない。仮にそのような関心がなければ、教育の仕事をめざす者としてはお粗末至極。そもそも教員に対する不信感ゆえの教職志望であれば、反面教師になりうるかどうかを見抜けばよい。逆に憧れであれば、いっそのこと、近づいて嗅覚を働かせてみる。いずれにせよ、動物的勘がどこまで働くか。人工空間に生きるようになって、人間は益々、本来持っていた動物的勘を減退させている。要注意。

話が飛んだか。

3. 子どもの貧困とは、当事者だけの問題ではない。同級生としての問題。貧困が自己肯定感の不足、学力の低下等々の一因となり得る。同じ仲間として無関心ではいられないだろう。実習先は公立。そのような子どもの実態を知っただろう。だから卒論の主題に取り上げたのだから。

卒論に取り組む際に、そのような子どもが常に目の前にいたのだろうか。誰に向けての叙述か。象徴的に言えば、ゼミ生の一人が得たインド体験に関わって、物乞いをした人びとが卒論に励む自分を支えたかどうか。問いかけたかどうか。卒論にそのことを綴ったかどうか。私が読んだ限りは、卒論を終えた段階での謝意はなかった。研究の動機となった人びとである。どこまでのことが卒論でできたかを報告する。課題も書く。彼らからの問いかけがあるだろう。

授業では触れたことがある。イスラエルからの砲撃によって破壊され、廃墟になった家から教科書を探すパレスチナの少女たちの写真。その夜、少女たちのことが夢に出た。目覚めて、記録に残した。いずれ、現地を訪問したいという願い

がある。元気なうちに。〔沖繩も未訪問。退職後、しばらく沖繩生活をしたい、と家族にそれとなく語ったところお叱りを受けた。未成年者を抱えているので当然か。アウシュヴィッツ訪問などは、切り出せず。話が飛んだ。〕

私は、常にこれまで出会ってきた人びとに、間接的に出会った人びとも含めて、見られながら仕事をしている。無様な仕事はできない。(隠れて無様なことをしようにも、相手からは丸見え。ああ、恥づかしい。)

4. 政治屋の子ども時代。彼らが子どもの貧困に関心が低いのは、子ども時代にそのような事情の子どもに出会っていないからだろう。公立学校であれば、出会う機会はあっただろうに。しかし、一定以上の資産がなければ入学できないような私立学校では、出会う機会はほとんどないだろうから。社会の現実を知らない、能天気な政治屋になるのも当たり前だろう。政治家の育った家庭のことを読むと、さもありなん。そのような人は政治の世界で仕事をするべきではないのだが。

人は、自分が出会ったことがない人のことは分らないものである。間接的に知ることもなければなおさら。

話が飛びついでに。灰谷健次郎の『兎の目』『太陽の子』『私が出会った子どもたち』等を通して、多様な子どもと間接的に出会っていないければ、そのような子どもに直接的に出会った時にはうろたえるだろう。高史明・辺見庸等々が語る世界についても同様。多読効果を発揮したい。直接・間接に多種多様な他者と出会うことが教員の職務の出発点。

5. 苦言 そうであればこそ苦言。ゼミや授業等で学んだ本が生かせなかった。大田堯をはじめとする10冊以上。ゼミ生に限らないが、学びが点に終わっている。繋ぐ学びができない。主体性の問題。読解力も。〔(2.26の学内研修会。本学入学生の半数以上が、高校時代にほとんど本を読まなかった学生。考えてみれば、私はこのような学生を相手に授業をしてきた。例えば、「合理的説明」という言葉が分からない。日常的に使わないから。教育における「政治的中立性」のことを4年後期の授業で扱う。「忠実制」と誤記する学生も。その学生にとっては誤記ではないのだろう。時の政権の言う通りにすることが国民の義務とでも考えている訳でもないだろうが。真に「忠実なる、汝臣民よ。」(資料は、「忠良なる汝臣民に告ぐ。我が帝國は、い」と続く。)時代は、70年以上も前のことになっている。教育史で学んだのではなかったか。(ああ)課題は続く。〕

本ゼミでは、年間10,000頁読書を課す。新書や文庫中心。250頁の40冊分。授業テキストを含め、読んだ回数をかけると、ゼミで読む冊数は20冊程度で10,000頁に到達する。ゼミ生は、教育実習Ⅰ春季課題で読んだ教育実践書をどう卒論に生かしたのか。今後とも、ひたすら学びたい。さもなくば、子どもから相手にされない。(徳本も、読まなければ学生から相手にされなくなる。もう相手にされてくない?)

6. 苦言の続き。具体的な指導計画、授業指導案等が書けなかった。理由は何か。思いの不足か。先輩の卒論には、そのような優れた作品が多々ある。どこまで参考にしたのか。参考作品は多いほうがいい。

卒論発表会後、1ヶ月になる。現在、課題にどこまで取り組んできているか。卒論の課題は、就職までの事前学修として必須の作業である。たとえ十分にはできなくとも、取り組んだという過程が大事になる。それが子どもと出会った時の自分のなかの誇りとなるだろう。

人は、やるべきことをやっていないと、自分のなかに肯定感が生まれない。ついつい、卑屈になるか、逆の身構えが生まれる。言い訳を考えつくようになる。時間と労力の浪費。ありのままの自分でよしと思えるためには、やりたいと思ったら吉日。即刻動き出す。1行のメモだけでも十分である。その種が着実に成長していく。

7. 以下も苦言。4年生に限らない。私のなかにもある傾向。人は、成功した人の成功物語を自分も準えようとする。最短距離の成功を願う。費用対効果という発想か。成果主義の風潮の悪い影響か。過程主義であれば、もがいたことも評価されるのだが。自分なりのこだわりも大事にされるのだが。成果主義ではそのような成果の前段階のことはどうでもいいことになる。コールバーグの道徳性の発達段階説でいえば、小学校の低学年の次元。動機がいくら気高くとも、結果が悲惨であれば、非難される。

逆もある。動機が不純であっても、結果が出ればよし。はて、そのような事例はあったか。(次回までの宿題。災いを転じて福となす。これはある。しかし、本人が災いを起こすのではない。降りかかってきた災いではあるが、本人の人間的な器によって、福となるという世界。)

話が飛んだ。教育実習Ⅰ春季課題で収集した指導案も、集めただけで読み込んでいない学生が大半。収集家の次元。もったいない。過去、収集した指導案を読み込み、短評を書いた学生もいた。彼女は実際に優れた実習を行った。模擬授業の質も高かった。当然だろう。学びが自分のものになっていたからである。学びの姿勢が主体的だったからである。結果は自然についてくる。

8. 誉めも。教員を交えたゼミの前段階で学生同士の自主ゼミが後期以降、設定された。学生の思いもあったが、担当者からの強い要求もあった。教員がいなくては成り立たないような学びの時空は嘘。本来は、教員不在でも学び合う。また、そのような学生へと育つような関わり方をするのが優れた教員の指導性。私はその点で失格か。過去のゼミ生がそのようなよき伝統を作ってきたことの継続。これまでの指導と変わらなかったが、不十分であることが分かれば、適切に対処する。これが大事。事態を正確に観て、適切な診断を下し、最適な手段を講ずる。これが指導の基本。

自主ゼミでの学び。本年のゼミ生はどうだったか。かつての真剣勝負の世界を私は知っている。厳しいやり取りが展開された。むしろ、その分、お互いの卒論の中に学友の卒論参考文献が活用されることもあった。当然だろう。ゼミでの学びを通して、学友の卒論であっても、十分に説明ができるくらいに学んでいたのだから。

代理説明を試みるとい。仲間の卒論を簡単に紹介する。できた分、自分の学びが広く、深くなっている。これまでも、学友が仲間の卒論の概要を説明していた。仮に本人が発表できない事態が生じて、ある程度の代理が務まるであろうと思われるほどであった。その意味では、最も得をしたのは仲間から学んだ者。授業料は不要。どれだけその時間で学び得るか。ゼミが毎回、学会的な形で展開される分、学びの質は高まる。お追従は不要。ゴマすりも一利なし。一定程度の学びを感じ取ったがゆえの質問。遠慮は不要。共に、子どもの最善の利益の実現をめざす仲間。教員も仲間。遠慮は無礼。次元の低い、当事者性の乏しい質問は教員の成育歴からして恥づかしい。積極的に活用されたい。

9. 確かな応答を。先に他ゼミの学生のことを記した。本ゼミ生も、教員からの質問にきちんとした応答ができていない。質問されたら、その質問の方向に流れている。本筋から外れた質問であれば、本筋の部分で応答する。自分の卒論。頑固になることはないが、確かなものがあるのであれば、そのように応答したい。さもなくば、自分の卒論が泣く。下手をすれば、卒論が無くなる。ここでも学生と教員とは真剣勝負をする。切られて傷が大きいのは年上の教員の方。若くはない。それでも遠慮は不要。

10. 今後の課題 次なる課題は卒論の具体化。それを綴って『文教教育』に投稿する。2015年版にゼミ卒業生2名が書いた。それだけの思いがあるということか。あるいは、書くことに抵抗がないということか。担当教員が書くので、競争しようということか。ありがたいこと。担当教員と張り合おうとする感覚を持つことは大事なことです。

<3年次生関係>

1. 『文教教育』原稿。推敲に苦労した。深い部分の思いが書けない。苦労はいいこと。苦労した分しか、優れた作品にならない。発信は自分の中での葛藤を経た分しか、確かなものにならない。推敲は他者の読み手を意識するから生まれる。

教育実習体験者。教採冬季セミナー「教育原理」の時に触れた。研究授業の報告書を書く。最低でも4頁程度にはなる。本学にはそれを書く学生はほとんどいない。報告会用に4,500字程度のまとめを書くが、研究授業については多くても1,000字程度。かく言う私も書かなかった。私の場合は、卒業学年2月に実習を体験したからという言い訳もできる。3年後期であれば書いたかもしれない。実習体験の課題を残りの大学の学びで深めることができる。その意味では、現行の実習期間方式は有効である。その分、学生の主体生の度合いはいっそう問われる。

その点、前回のセミナー受講生の受身的な雰囲気はどうしたのだろうか。会議の都合で過去問。「問題集なら、自分でもできる。」という。そうです。これまで授業で扱ってきたことが出題される。自力解決できなかったことを共同で担当者に問われない。ただし、集団討論は別。一人ではできない。解説も回答も記載されていない。その場に行かなければできないことだから。しかし、集団討論には参加しない。この矛盾には気づかない。気づけない。

初步的な事実を知らなければ馬力は出ない。子どもの貧困が見えなければ、馬力は出ない。実習先で出会うことはなかったのか。そんなことはないだろう。見えなかっただけのことだろう。見える者にしか視えない。聴こえる者にしか聴こえない。見聞ではない。視聴である。だから視聴覚教材という。見聞教材とは言わない。リスニングという。ヒアリングではない。

私は実習後に研究授業報告を書かなかったが、大学就職後は授業実践を可能な限り書いてきた。専門性向上のためである。同業者からの批評を仰ぐためでもある。書かないと堕落するのが分かっていったから。以上、セミナー受講生への苦言。

2. 卒論構想はいかに。なかなかみえてこない。私が担当するのはここまでとはいえ、当初、半分の2万字程度の作品を書くことを求めているが、OC模擬授業の記録だけでも10,000

字超えか。卒論構想の中でどう位置づけるのだろう。

初めての年間読書10,000頁到達ゼミ生。多読効果がどのように発揮されるか。楽しみ。子どもの貧困にはどこまで絡んでいるだろうか。犬養道子『人間の大地』は、どこまで活用されているだろうか。本書に私は大きな影響を受けた。その分、授業等への迫力は強くなった。不条理の人への思いはより強くなった。出会ったのは、40歳代前半だったけれども。図書館で借りた。文庫本になってから購入した。道徳教育の研究・教育史・教育原理等で紹介し続けている。非常勤講師としても。10年前であったか、山キャンでの学生の作品。絶世の美女がハウスキーパーとして徳さんの帰りを待つという設定の物語。私が強調したのは、「グローバルハウスキーパー」だったのだが、授業の半分以上は学生の心に響いていたことが判明して嬉しかったことを覚えている。二人は仲睦まじく暮らしている。

3. さらなる投稿を。書いた分しか力はない。新聞投稿で技量は磨いてきている。見事なこと。技量を卒論に活用する。投稿作品の活用も。

<2年次生関係>

1. 『文教教育』原稿。2年次生が書くのは久しぶり。全国の教員養成系の大学の図書館に届けられる。名前も出る。今回は、学生の希望もあって文責を示した。今後はこの方式で行くか。私自身は、退職後も学会員は続ける。毎年、私の実践のまとめを書き続ける予定。

2. 10,000頁へ。未読本がどこまで読めるか。読んだ分、成長する。自分に課してみる。読解速度は速くなっているはず。3名は代表授業を体験。立候補。その主体性には敬服。その経験が多読効果とどこまで繋がっているのだろうか。本を通して出会った著者からどこまで背中を押されているのだろう。また、そのことがどこまで綴られたか。

<1年次生関係>

1. 紙上参加学生も。やんごとなき用事で参加できないという。印刷物を持参。おかげでゼミ室で3日前に話ができた。教育史学習も絡めて。歴史を前に進める役を担っているという自覚を有する学生の一人。それだけに自分に厳しい。現状の改善のために今なお、十分なことができていないと、自らを叱咤される姿は美しい。内剛外柔の見本。本学がめざす理想的な人間。教員が不在でも学ぶ。その分、教員には質の高いものを要求できる。成長が楽しみ。私は本年度で退職の身。成長の姿を見る機会はありません。

2. 歴史を動かす。教育史授業の報告書を作成中。2年生の一人には伝えたこと。歴史の略年表。正の方向、負の方向のいずれで歴史が動いているか。(人びとが動かしているのだが、)それを書いていない。書かないから、歴史に対する責任感が生まれない。学ぶことに本気になれない。上記の学生はどうなのだろう。

<教員関係>

1. 成績。8科目。600人近く。幸い、元気ゆえ、原稿書きや会議と並行して展開中。授業記録の材料となる。

教育史の授業総括終了。合同ゼミ資料も第一弾。

2. 実習の総括文も。別途作成中のゼミ総括の原稿も。20万字超えか。中味が乏しい。分量が多いだけになった。(以上)